

短期大学部幼児教育学専攻学生に対する幼児体育についての意識調査

板 谷 厚

Survey on the junior college students' attitude toward the physical education for infants

Atsushi ITAYA

Abstract

The purpose of this study was to investigate what the junior college students of the pre-school education specialty think about the PE taken in the kindergartens and nursery schools. In my questionnaire, the students were asked who teach PE and what is taught in PE. Analyses of the answers revealed that one-third of the student thought that only expert PE teachers should teach PE. Playing with balls was more preferred in the answers of the students who thought only expert PE teachers should teach PE than in those of the other students who thought only nursery teachers should teach PE. These results suggest that especially when the junior college students of the pre-school education of specialty will teach infants to play with balls, the students would require expertise in sports and physical activities.

Key words : junior college students, infant, physical education, nursing, playing with balls

Email: Atsushi.Itaya@gifu.shotoku.ac.jp, TEL: +81-58-278-4160

1 はじめに

現代社会に生きる我々は科学技術を発展させ、生活の便利さを追求してきた。その結果、運動する機会が減り、生活習慣病をはじめとする健康問題への対策に苦慮するようになった。このような社会的背景の下、文部科学省が「幼児期運動指針」¹⁾を策定するなど、幼児期の運動経験を充実させようとする機運が高まっている。今後、保育者養成校は、これまでも増して、幼児期の運動経験の重要性を理解し、適切な援助ができる保育者を育成することが求められることは必至である。

これに関連する幼児保育現場での取り組みの現状について、北海道から沖縄までの全国の幼稚園43園を対象に行なった健康・体力づくりの意識と運動指導の実態調査²⁾によれば、40園(93.0%)が何らかの形で健康・体力づくりを心がけていた。保育時間内に運動指導を行っている幼稚園は32園(74.4%)にのぼり、これらの園の26園(81.3%)では、保育者以外の体育運動専門講師(以下、専門講師)が運動指導を行っていた。運動指導の内容は、器械運動、サッカーや水泳、など特定の種目が多く挙げられていた。これらの結果から、幼稚園では、幼児の健康や体力づくりに高い関心があり、そ

の重要性を認識していることが示唆された。しかし、実際の運動指導は専門講師にまかされ、その指導内容は、小学校の準備教育としての意味合いを色濃く反映して、特定の種目の技能向上を目指したものになっており、必ずしも幼児期に適した運動指導が行われていないことが示唆された。つまり、幼稚園における運動指導の問題点として、担任などの保育者の関わりが少ないことと指導内容が特定種目に偏っていることの2点が挙げられている。この報告の対象は幼稚園に限られているが、保育所でも結果が大きく異なることはないと思われる。

保育者養成校は、保育者を志望する学生に対する指導を通じてこれらの問題に対応していかねばならない。しかし、具体的で有効な指導指針を策定する前段階として、学生が保育所および幼稚園（以下、保育施設）で行われる運動指導についてどのような考えを持っているか、予め把握する必要があると考えられる。

そこで本研究は、将来保育者となる可能性が高い幼児教育を専攻する短期大学生（以下、学生）が、保育施設で行われる運動指導の指導者と運動指導の内容について、どのように考えているか調査した。

2 方法

2.1 対象者

G大学短期大学部幼児教育学科に在籍する卒業年次生139名（女性135名、男性4名）を対象とした。調査は前期開講科目の「基礎体育Ⅰ」の初回授業の冒頭に行った。「基礎体育Ⅰ」は、受講生を4クラスに配分して開講しているために、調査はクラスごとに実施した。調査に先立ち、対象者には、質問に対する回答および提出は任意であり、回答用紙の提出の有無および回答の内容は、授業成績になんら影響しないことを口頭で伝えた。

2.2 質問紙調査の手順

対象者は授業開始時間に体育館に集合した。授業開始の挨拶の後、対象者に調査用紙（A4）を1枚ずつ配布し、質問に対する回答を用紙に記述するよう口頭で指示した。保育施設で幼児を対象に行う運動指導について質問する旨を伝えた上で、次の2つの質問をした。

質問1. 保育施設での体育は誰が行いますか？

質問2. 保育施設での体育ではどんな活動を行いますか？

対象者は学校教育の中で「体育」の名称の下で運動指導を受けてきている。このことを考慮して、対象者に違和感なく受け入れられるよう、運動指導を示す用語として「体育」を採用した。回答方法は、本研究は学生の実態を捉えることを目的としたので、予め選択肢を用意せず複数回答可能な自由記述とした。対象者にはできるだけ具体的に、思いっただけ記述するように求めた。回答用紙は裏面も使用可能とし、回答のための十分なスペースを与えた。用紙には記名するよう依頼した。

2.3 データ分析

予備分析としてすべての回答を逐語的に集計し、意味内容が同一とみなせるものをまとめた。さらに、意味内容に基づいて分類し、対象者の10%以上に当たる出現度数14以上の分類カテゴリーを抽出した。図1に、以上の分類カテゴリーの抽出手順を模式的に示す。質問1では、保育者（担任、主任、先生等）と専門講師（外部講師、体育専門講師、体育の先生等）の2つのカテゴリー（以下、指導者カテゴリー）が抽出できた。質問2では、器械運動（マット、跳び箱、鉄棒、平均台）、ボー

ル運動（ボール遊び、ボール投げ、サッカー、ドッジボール等）、基本的な運動（かけっこ、ジャンプ、発達に合わせた運動等）、なわとび（なわとび、大なわ等）、伝承あそび（鬼ごっこ、だるまさんがころんだ）、体操・ダンス（体操、リズム体操、ダンス、おどり等）、固定遊具（登り棒、雲梯、すべり台等）、フラフープの8つのカテゴリー（以下、内容カテゴリー）が抽出できた。これらのカテゴリーに全対象者の回答を分類し、統計解析に供した。

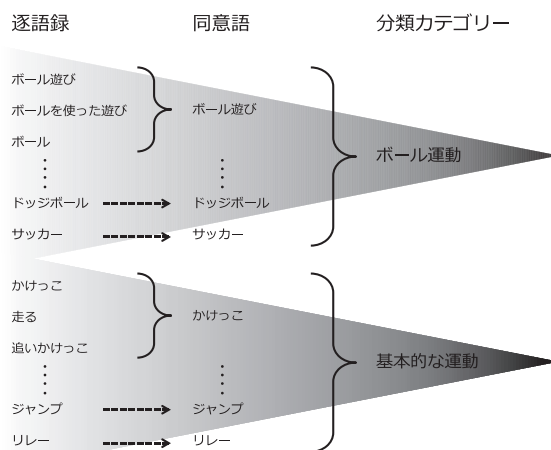


図1 分類カテゴリーの抽出手順

逐語録から同意語をまとめ、それらをさらに上位概念のカテゴリーに分類した。約10%にあたる出現度数14以上のカテゴリーを質問1と質問2でそれぞれ指導者カテゴリーと内容カテゴリーとして抽出した。

2.4 統計解析

質問1についてはカテゴリー間で出現率が異なるかどうかを検査するためにMcNemarの検定を実施した。さらに、保育者のみ、専門講師のみ、および、その両方を回答した者の出現率を適合度検定によって検討した。質問2についてはCochranのQ検定によってカテゴリー間で出現率が異なるかどうかを検討した。内容カテゴリーについて出現率が均等でないと判断された場合には、多重比較検定として、内容カテゴリーのすべての対についてBonferroniの方法によって有意水準を調整したMcNemarの検定を実施した。

指導者カテゴリーと内容カテゴリーの回答間の関係性を検討するために、質問1で保育者のみを回答した者と、専門講師のみを回答した者について、内容カテゴリー毎に出現率の差の検定（独立性の検定）を行った。なお、保育者と専門講師の両方と回答した参加者の内容カテゴリーデータは、どちらの指導者を想定して回答したものが判別できないので、この分析からは除外した。すべての統計解析の有意水準は $\alpha = 0.05$ とした。

3 結果

質問紙は対象者全員から回収できた。ただし、質問1について質問の意図が理解できていないと考えられる回答が1名（男性）に認められた。本研究の目的を考慮して、この1名の回答は予備分析を含めたすべての分析から除外した。

3.1 指導者カテゴリー

出現度数は、保育者96名(69.6%)、専門講師98名(71.0%)であった(図2)。McNemarの検定の結果、保育者と専門講師の出現率に有意な差は認められなかった($X^2 = 0.012, p = 0.9128$)。保育者のみ、専門講師のみ、およびそれらの両方を回答した者は、それぞれ、40名(29.0%)、42名(30.4%) および56名(40.6%)であった(図2)。適合度検定の結果、これらの出現率の相違に有意性は認められなかった($X^2 = 3.304, p = 0.1917$)。

3.2 内容カテゴリー

内容カテゴリーの出現度数を図3に示す。CochranのQ検定の結果、各内容カテゴリー間の出現率に有意差が認められた($Q = 141.274, p < 0.0001$)。多重比較検定の結果、器械運動77名(55.8%)、ボール運動63名(45.7%)、基本的な運動54名(39.1%) および、なわとび47名(34.1%)は、それぞれ、伝承遊び23名(16.7%)、体操・ダンス20名(14.5%)、固定遊具17名(12.3%)、フラフープ14名(10.1%)よりも有意に出現率が高かった(表1、図3)。さらに、器械運動となわとび間の出現率の差に有意性が認められた。

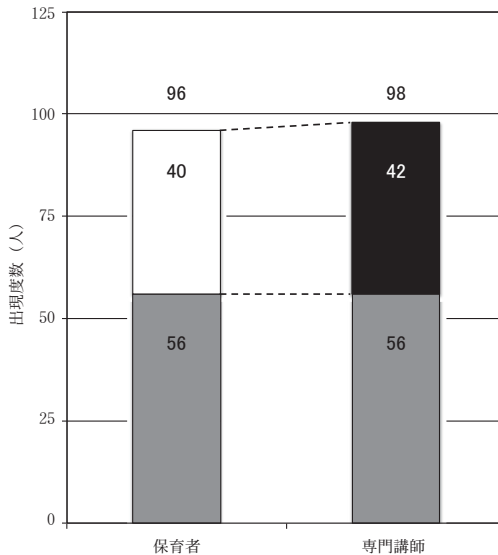


図2 指導者カテゴリー別度数

白抜きは保育者のみ、黒塗りは専門講師のみ、灰色の塗りはそれらの両方を回答した度数(人)。分析総数は138。保育者と専門講師の出現率間に有意差なし。保育者のみ、専門講師、およびそれらの両方を回答の出現率間に有意差なし。

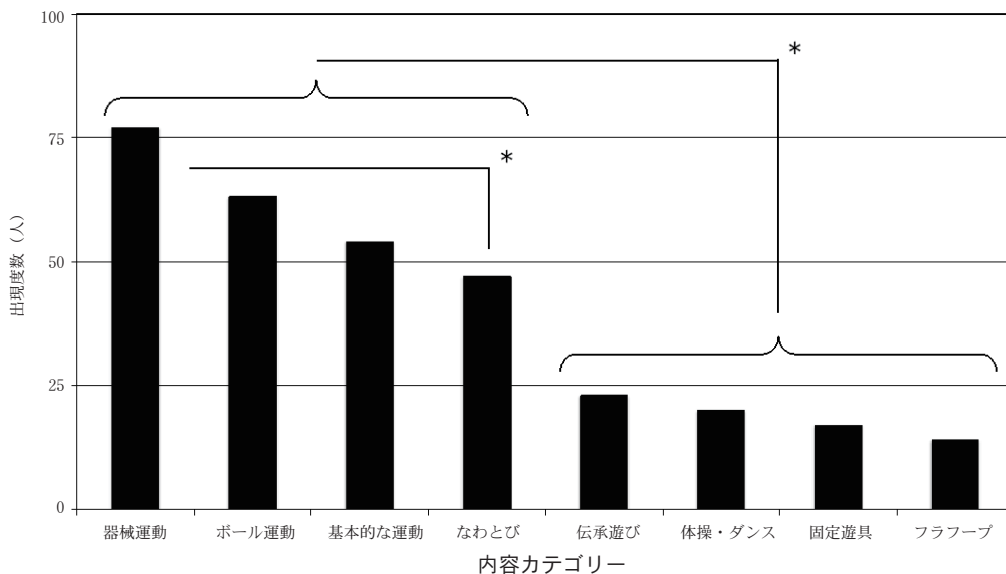


図3 内容カテゴリーの出現度数

*: $p < 0.05$.

表1 各内容カテゴリー間の出現率比較（多重比較検定の結果）

	器械運動	ボール運動	基本的な運動	なわとび	伝承あそび	体操・ダンス	固定遊具	フラフープ
器械運動		X ² = 2.817 p = 0.0933	X ² = 6.286 p = 0.0122	X ² = 11.681 p = 0.0006	X ² = 33.440 p < 0.0001	X ² = 41.813 p < 0.0001	X ² = 45.803 p < 0.0001	X ² = 46.331 p < 0.0001
ボール運動			X ² = 0.810 p = 0.3681	X ² = 3.879 p = 0.0489	X ² = 22.368 p < 0.0001	X ² = 27.138 p < 0.0001	X ² = 29.779 p < 0.0001	X ² = 35.446 p < 0.0001
基本的な運動				X ² = 0.554 p = 0.4567	X ² = 15.254 p < 0.0001	X ² = 19.446 p < 0.0001	X ² = 19.2817 p < 0.0001	X ² = 27.161 p < 0.0001
なわとび					X ² = 9.796 p = 0.0017	X ² = 13.796 p = 0.0002	X ² = 16.820 p < 0.0001	X ² = 24.976 p < 0.0001
伝承あそび						X ² = 0.114 p = 0.7356	X ² = 1.136 p = 0.2865	X ² = 1.829 p = 0.1762
体操・ダンス							X ² = 0.114 p = 0.7356	X ² = 0.893 p = 0.3447
固定遊具								X ² = 0.148 p = 0.7005
フラフープ								

網掛け部分は統計的に有意。なおBonferroniの方法によって修正した有意確率は0.0018 (0.05/28)。

3.3 指導者カテゴリーと内容カテゴリーとの関係性

質問2において、保育者のみ回答した者と専門講師のみ回答した者の各内容カテゴリーの出現率の差を検討した結果を図4に示す。ボール運動では専門講師のみの群で出現率が有意に高くなった（保育者のみでの出現率 vs. 専門講師のみでの出現率 [%]: 30.0 vs. 52.4, X² = 4.228, p = 0.0398, 以下同様）。伝承遊び(22.5 vs. 7.1, X² = 3.868, p = 0.0492)、固定遊具(27.5 vs. 0.0, X² = 13.339, p = 0.0003) およびフラフープ (20.0 vs. 2.4, X² = 6.509, p = 0.0107)では保育者のみの群での出現率が有意に高くなった。器械運動(45.0 vs. 52.4, X² = 0.447, p = 0.5038)、基本的な運動(50.0 vs. 35.7, X² = 1.709, p = 0.1911)、なわとび(35.0 vs. 28.6, X² = 0.391, p = 0.5318)および体操・ダンス(12.5 vs. 16.7, X² = 0.285, p = 0.5934)では、出現率の群間差に有意性は認められなかった。

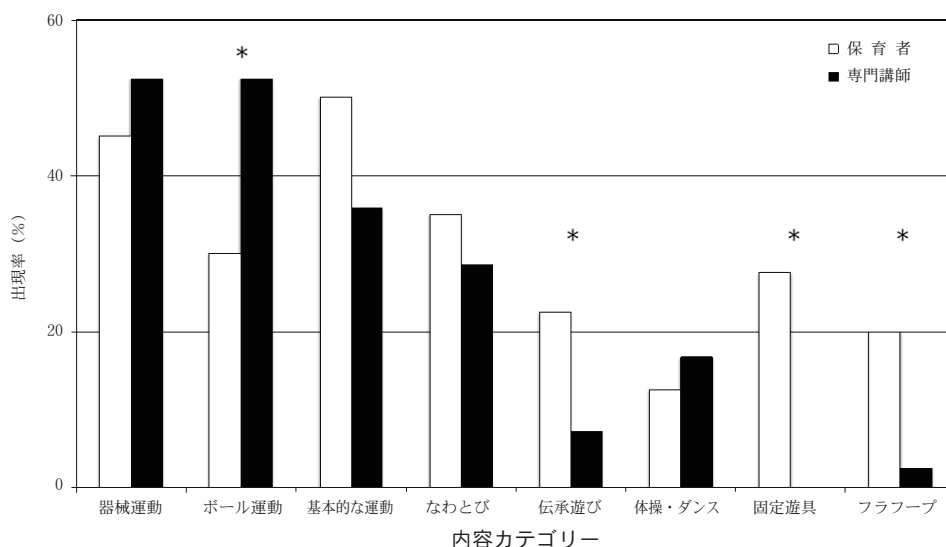


図4 対象者間の内容カテゴリー別出現率比較

白抜きは保育者のみ、黒塗りは専門講師のみ。*: p < 0.05.

4 考察

4.1 指導者カテゴリー

分析の結果、保育施設における運動指導者として保育者と専門講師のそれぞれを考えた学生がほぼ同数（約7割）であった。さらに、保育者のみ、専門講師のみ、および、その両方と考える学生がほぼ均等に存在することが分かった。先に述べた先行研究では、幼稚園の約6割に専門講師がいることが示され、保育者の健康や体力づくりに関する知識や理解が十分でないために、保育者は幼児の体育運動活動が特別なものと考えていることが示唆されている²⁾。この先行研究と同様に考えるのであれば、本研究の結果は、学生が幼児に対する運動指導を特別なものとして捉える傾向があることを示しているのかもしれない。しかし、これと同時に約4割の対象者が専門講師と保育者の両方を挙げたことを考慮すると、学生が専門講師と保育者の協働や役割分担をある程度想定しているとも考えられる。

4.2 内容カテゴリー

各内容カテゴリーの出現率を分析した結果、器械運動、ボール遊び、基本的な運動、なわとびの出現率が比較的高く、伝承遊び、体操・ダンス、固定遊具、フラフープは出現率が比較的低いことが分かった。器械運動、ボール遊び、なわとびは、使用する用具が保育施設各所に設置されており、学生が幼児期に保育施設で見たり遊んだり実際に指導された可能性が高いものである。さらに実習先の保育施設でこれらの用具を目にする機会もある。このため、学生が想起しやすく、出現率が高いと考えられる。これらに対して、固定遊具とフラフープもまた多くの保育施設に設置されているが、これらの出現率は比較的低かった。これらは自由遊びの中で行われ、指導そのものが不要か、指導に体育・スポーツの専門性が不要と学生が感じていることが示唆される。

用具を用いない活動として、基本的な運動、伝承遊びおよび体操・ダンスが内容カテゴリーとして抽出された。幼児の運動場面といえば、元気に駆け回っている姿を想起することは自然なことのように思われる。実際に、基本的な運動に分類された回答は、かけっこに代表される走運動を示すものが大半であった（49/54）。伝承遊びに分類された回答は、鬼ごっこが大半であった（22/23）。伝承遊びの出現率は比較的低く、固定遊具やフラフープと同様に、伝承遊びの指導には体育・スポーツの専門性は必要ないと学生が考えていると推察される。

4.3 指導者と内容の関係性

本研究の結果、運動指導者として専門講師のみを回答した対象者の方が、保育者のみを回答した対象者よりも、運動指導内容としてボール運動をイメージする確率が高いことが分かった。このことは、幼児に対する運動指導の内容として、ボール運動は体育・スポーツの専門性を備えた専門講師が指導する方がよいと学生が考えていることを示唆する。ボールを用いた運動の典型である投球や捕球は、幼児期に習得すべき基礎的運動パターンに含まれるが、対象物を操作する点で、歩、走、跳などの生得的な運動とは異なり、幼児にとって複雑な運動課題の一つである³⁾。このことが、ボール運動の指導には体育・スポーツの専門性が必要だと学生に感じさせる一因となっているのかもしれない。

この結果の裏を返せば、将来保育者となる学生本人が、ボール運動の指導に対して消極的であることを示しているとも考えられる。本研究の対象者のほとんどが女性であった（185/188）。女子は

幼少期に投球や捕球を学習する機会が男子よりも少なく、投球や捕球が比較的未習熟⁴⁾で、その差が成人にまで存続する。また、女性の場合、運動能力に自信がないという心理がスポーツへの参加を妨げる原因になることが知られており^{5) 6)}、同様のことが運動指導に対しても生じることは容易に推測できる。したがって、この結果の背景には、投球や捕球に自信がない女性が、(多くは男性が想定される) 専門講師に、ボール運動の指導をまかせてしまいたいとの心情が働いているのかもしれない。言い換えれば、運動に対する苦手意識が専門講師に対する依存を生じさせている可能性がある。

ボール運動とは対照的に、伝承遊び、固定遊具およびフラフープでは、指導者として保育者のみをイメージした対象者で、専門講師をイメージした対象者でよりも出現率が高くなった。これらの内容については、保育者自らが指導でき、しかも、普段の自由遊びの中で十分に行っているの、わざわざ専門講師による運動指導の時間を取ってまで指導する必要がないと多くの学生が考えていると推察される。

4.4 結論

幼児教育学専攻の短期大学生が想定している保育所および幼稚園における運動指導者は、保育者と専門講師で、その両方とする者もあった。それらを想定する学生の比率間に差はなかった。運動指導の内容としては、器械運動、ボール運動、基本的な運動、なわとび、伝承遊び、体操・ダンス、固定遊具、フラフープがイメージされており、器械運動、ボール運動、基本的な運動およびなわとびをイメージする学生の比率が比較的高かった。保育者のみを運動指導者としてイメージした学生は、専門講師のみをイメージした学生よりも、運動指導の内容として伝承遊び、固定遊具およびフラフープを挙げる者の比率が高かった。一方、専門講師のみとした学生は、ボール運動を挙げる者の比率が高かった。これらのことから、幼児教育学専攻の短期大学生は幼児に対するボール運動の指導には体育・スポーツの専門性が必要だと考えていることが示唆される。

文献

- 1) 文部科学省：幼児期運動指針について。
http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/undousisin/1319192.htm, 2012.
(2013年9月25日閲覧)
- 2) 吉田伊津美、杉原隆、森司朗：幼稚園における健康・体力づくりの意識と運動指導の実態。東京学芸大学紀要総合教育科学系、58: 75-80, 2007.
- 3) 松浦義行：体力の発達。朝倉書店、東京、pp.5-123, 1982.
- 4) Nelson, K. R., Tomas, J. R. and Nelson, J. K.: Longitudinal change in throwing performance: Gender differences. Res. Quart. Exerc. Sports, 62: 105-108, 1981.
- 5) 長見真、嘉戸脩：中高年者のスポーツキャリアパターンに及ぼす体育授業経験の影響。東京学芸大学紀要第5部門芸術・健康・スポーツ科学、45: 173-180, 1993.
- 6) Spreitzer, E and Synder, E. E.: Socialization into Sport: An Exploratory path analysis. Res. Quart. 47: 238-245, 1976.

